

草庵仏教

第170号
(発行日)
2004年8月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール：kimyou4@yahoo.co.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
- 〈念仏座談会〉
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の〈同朋の会〉及び
第3土曜日の念仏会は休み。

真宗問答②

死後について

L「前号では、信心が定まって正定聚の位に入った人が、浄土に生まれて仏になるとお聞きしました」

D「ええ、聖人は『一念多念文意』に

正定聚の人のみ真実報土にうま

るればなり
と仰せられています」

L「では、本願を信じたくてもなかなか信じられない人はどうなるのでしょうか」

D「本願を信じる真実信心が定まらずに、阿弥陀仏のご本願を

疑いながらも念仏を称え続ける

人は、真の浄土に生まれずして

仮の浄土に生まれて、そこで更

にお育てを頂いてから真実の浄

土に生まれるのだとお聞かせい

ただいています」

L「では、全く信心がなければ

どうなるのでしょうか」
D「その人に仏になる因がない

なら、また流転するとお聞かせ

いただいています。ただし、こ

れは他者の上の事を云々するこ

とではなくて、自分に引き当て

ての話です。銘々が自分自身の

こととして受け取るべき事であ

って、他者を評価するためのモ

ノサシではないでしょう」

L「流転するというのは」

D「死後、迷いの境界をさらに

流れ転がっていくということ

です」

L「それは靈魂が残っていくと

いうことですか」

D「一般にはそういうわけですが、

積尊は実体的な靈魂があるとい

うことは否定されています」

L「なぜですか」

D「積尊当時のバラモン教では

アートマンといって、変わらな

い(我)と言うものを認め、死

んでもそれが相續するとされて

いました。ちょうど上皮が無く

なっても、中の実は変わらず、

また次の上皮を付ける、そのよ

うに生まれ変わり死に変わりし

ていろいろな身を受けるけれど

も、それは上皮の部分が変わる

だけで中の実としてのアートマ

ン(我)は変わらないという、

そういう教えが流布してしまし

た。積尊はそういうアートマン

というものは無い、無我とい

うのが真相だと教えられ、人は死

んだからといってアートマンと

いう我が残っていくのではない

といわれました」

L「では人は死ぬと、何も残ら

なくて、まったく無に帰してし

まうのですか」

D「それも仏教では(無の見)

といって邪見であるとされてい

ます。現代は科学的なものを見

方が人々に大きな影響を与えて

います。自然科学は物質の領域

を観測機器を使うなりして観察

し実験し分析してものの姿や法

則を知ろうとします。それによ

って、非常に多くのことが分か

つてきました。そのため科学的

唯物的な見方が一般化してきて

います。それはいわゆる観測機

械を使うにしろ(人間の知覚に

よって確かめられたものだけが

確実なもの)という立場です。

そうになると、人が死ぬと我々の

目には骨と灰しか確認できませ

んから、死んだ人は消えてしま

つて無になってしまったと理解

するのです。しかし、実際はこ

の世界は非常に神秘に満ち満ち

ています。中でも、目には見え

ない心とか意識の問題はまだま

だ謎だらけです」

L「分からないことが非常に多

いのですね」

D「そう思います。たとえば今

こうして私たちは考えています。

一体何が考えたり理解したりし

ているのでしょうか。そんな身

近なことさえ殆どわかっていま

せん。さて、死んだら実体的な

靈魂が残るといって考えを仏教で

は(有の見)といいますが、死

んだら何もなくなるという(無

の見)とともに、仏教では否定

されています。現代の日本人は

無の見の人が多いですね」

L「そうすると仏教では死んだ

らどうなるのですか」

D「肉体的な形は亡くなっても、

迷いの煩惱をもっている限り妄

想的に執着する意識いわゆる妄

執が相續するといわれています。

鎌倉時代の一遍聖人は

〈生死というは妄念なり。

妄執・煩惱は実体なし〉

〈ただ妄執が流転するなり〉

と言われています。妄念妄執の

意識が死んでもなお相續して流

転するが、しかし妄執には実体

がない。実体なくしてしかも連

続していくのだと言われている

す」

L「妄執というのがよくわかり

ません」

D「それについて仏教ではこう

説かれています。人間は五蘊の

集まったもの、すなわち色・受

《 盂蘭盆会法要 》

8月16日(月)
午後2時始まり

*なお、8月は22日の同朋の会と
第3土曜日の念佛座談会は休みます。

・想・行・識という物質的なはたらき（色）と精神的なはたらき（受・想・行・識）が仮により集まったものにすぎない。物質的なはたらき（肉体）と心的なはたらき（精神）の集まったもの、それが人間であり、こうした五蘊は一瞬一瞬変化しつづけるのです。ところが迷いの心は愛執・妄執として五蘊を取り込んで、それに対して（我あり）と執し（我が身あり）と執するのです。実際には五蘊の流れがあるだけなのです。仏教学者の佐々木現順博士の『業と思想』に

《人間は身・心（色・受・想・行・識）から成っている一つの相続に過ぎない。相続とは又、連続することでもあって、静止した実的存在ではない。それにも拘わらず、人間は此の無始以来連続している諸現象たる自己自身を、あたかも実体の如くに思つて、此れに執着する》

と述べておられます」

L 「色・受・想・行・識とは何ですか」

D 「仏教の言葉で、色は物質的存在の総称、受は感受作用、想は表象作用、行は意志作用、識は認識作用を表しています。こういう五つの要素が集まって人間の身心ができていますので、この外に我という実体があるのではないと言われています。にもかかわらず五つの要素の集積した身心を（我あり我が身あり）と盲目的に執着しているのです。いわゆる妄執しています」

L 「実体ではないこの妄執が人間が死んでもなお残る場合があるというのですか」

D 「ええ、この妄執的な意識の連続体が残ると言われています」

*

L 「その場合、意識の（連続体）というのはどういう事ですか」

D 「それは灯火が一瞬一瞬変わって連続するように、私たちの意識は一瞬一瞬移り変わりながらしかも同じ一つの意識の流れです。一般に、心というのはコロコロ変わるから心だと云われますが、そういうように変化し続けているのが私たちの心です。しかし昨日の私の心と今日の私の心、一年前の私の心と現在の私の心は違います。しかし、それでは昨日の私と今日の私は別人かと言えそうです。ありません。同一の私です」

L 「そうですね。もし昨日の心と今日の心が違うなら、別人になったかという、そうではなくて同じ私の心として続いていますか」

D 「同じ私の心です。そういうように心（意識）は変化しつづけて連続しています」

*

L 「そうすると、妄執的な意識の連続体が続いていくといわれるのですか。では、この世のいのちが終わると肉体としての身

はなくなくなるのですが、死後は意識の連続体はどのようなかたちで残っていくのですか」

D 「これについては、世親菩薩の『俱舍論』には、死後しばらくの期間は人間の目に見えない微細な五蘊として相続するといわれています。ただこれについてはいろんな異説があり、色蘊はなくて、受・想・行・識という心的な四蘊が相続するとも、あるいはアラヤ識として存続していくとも言われています」

L 「アラヤ識とは」

D 「私どものすべての経験や善悪の行いの結果がそこに保存され、またそこからさまざまな意識現象（表象）が起つてくる、そういう深層の意識です」

L 「俱舍論で（ある期間）人間の目に見えない五蘊として相続するといわれましたが、そのある期間というのはどういうことですか」

D 「たとえば死後、次にまた何らかの身を受けるまでの間ということですね。その間の存在を中陰または中有といっています」

L 「初七日とか四十九日とかいわれる中陰のことですか」

D 「そうです。少なくとも死後四十九日の間にまた次の身として生まれ変わるとい説ですが、中有を認めない説もあります」

L 「死んでもまた身を受けていく。いわゆる輪廻転生ということですね」

*

D 「そうです。ただこういうことは実際に観測して実証的に調べた結果というのではなくて、仮説であることはいまでもありません」

L 「死後のことは誰も経験できませんから、死後どうなるかは仮説でしか言えませんね」

D 「そうです。ただし、仮説というのは単なる空想や妄説というのではなくて、（このように考へなくては道理に合わない）（このように理解するのが一番自然である）ということですね」

L 「実験的観測的に確かめる事は出来ないが、ものの道理から推論して、どうしてもこのように考へなければ理に合わないという、そういうのが本来の仮説ですね」

D 「ええそうです。自然科学の領域でもしばしば仮説が立てられます。のちに実験的に確かめられるということがよくありますね。たとえば湯川秀樹は（中間子の存在）を思索によつて予言しました。いわゆる仮説ですね。その後何年もたって、中間子の存在が観測され確認されました。今の死後のことも仮説としてということでしょう。ただし、この場合の仮説は死後のことですから、実験や観察で確かめるわけにはいきませんが」

L 「こういうお話は現代の私たちになじみにくいですが」

D 「そうです。ですが、死んだらどうなるかについて、（分からぬという立場）か、あるいはすべての（人は死んだら無くなる、いわば大自然の生命のいとみなの中に帰滅するという立場）か、あるいは（意識なり、魂なりが存続するという立場）があり、どれか一つを選ばざるを得ない。そうするとどれを選ぶことが私にとつて本当に納得できるか、あるいは落ち着けるか、そのことは銘々を選ばざるを得ません」

*

D 「普通よく聞くのが、死んだら、大地に花が枯れて帰る如く、おおいなる自然のいのちのいなみに帰るといふ考えですが、Dさんはどれを選んでいきますか」

D 「私は真宗のお聖教に従つてものを考へています。いわゆる、亡くなって浄土に生まれて仏になる人はもはや流転しない。真実の仏と一つになる。しかし、浄土に生まれて仏になることがないなら、化土に生まれなければ私の妄執的な意識は存続していくという立場です。しかし、この説を絶対化して周りの人たちに押しつけようとは思いません。ただこの立場でお聖教を読むと非常によく分かります。なお、現代人の多くの人がいうような、みんな死んだら大自然のいのちに帰るといふのは、よくするに死んだら無になるというのと同じことをいつてのだと思えます。このことについてはまた述べたいと思います」

（了）

歎異抄 第十六章第一講

信心の行者、自然に、はらをもたて、

あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて口論をもしては、かならず回心すべしということ。この条、断悪修善のここちか。一向専修のひとにおいて、回心ということ、ただひとたびあるべし。その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのころにては、往生かなうべからずとおもいて、もとのころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、回心とはもうしそうらえ。

(歎異抄第十六章より)

(語句の説明)

同朋同侶——同じ浄土の教えを聞く友達であり仲間。

断悪修善——悪を断ち善を行うこと。

(現代語訳)

本願を信じて念仏する人は、おのずと、ふとしたことで腹を立てたり、悪いことをしたり、同じ念仏の仲間と口論したりしたなら、必ずそのたびに悪い心をあらためなければならぬということについて。

このことは、悪を断ち切り、善を修めて浄土に往生しようという考えなのではないか。

本願を信じてひとすじに念仏する人にとって、心をひるがえすということは、ただ一度だけあるものです。それは、つねひごろ本願他力の真実の教えを知らないで過ごしている人が、阿弥陀仏の智慧

をいただき、これまでのような心のままでは浄土に往生することはできないと知って、その自力の心を捨てて本願のはたらきにおまかせすることであり、これを「回心」というのです。

*

今回から歎異抄第十六章に入ります。この章は真宗の回心についての異義を指摘し正そうとする意図で唯円様が記されたものです。

最初のところに「自然に、はらをもたて」とありますが、この「自然に」は金子大栄師のご指摘によりますと、自然に「回心すべし」にかかることとです。そうすると、ふとしたことで腹を立てたり、悪いことをしたり、同じ念仏仲間と口論したりする、そうした悪心、ここではおもに怒りの心ですが、こうしたことが起こるたびに「ああ申し訳なかった、怒ってしまった」と懺悔し悔い改めるべきであり、信心の行者であれば自然にそうあるはずであるという、しかしながらそういう人たちの言われることは聖人の仰せくださる真宗の思召しに異なっていると、唯円様は批判されるのであります。

*

ここで初めに「回心すべし」という異義者の回心とは廻心懺悔のことで、自らの罪悪を反省し、悔い改める、そういう意味の回心であります。

一方、浄土真宗でいわれる「回心」というのは凡夫自力の心を離れて弥陀の本願をたのむ信心へとひるがえることとあります。ですから回心の内容が違います。一方は道徳的な反省、一方は宗教的真実とのあいだの経験を用いのであります。「一向専修の人」すなわち真宗の念仏

を行じる人たちにとって、真宗の回心というのとはそれがひとたび起れば、生涯に相續されていくもので、決してなくならないものですから、回心が二度も三度もあるはずがないのです。すなわち信心が一度起れば、それが相續されていくのです。

ところが、悪いことをしたその度に回心すべきであり、信心の行者なら自然に回心がなされるべきであるというのは、真宗のいう回心ではありません。それは道徳的反省の立場であって真宗信心ではないのであります。

これに関連してですが、自分の悪が知らされて、「ああ悪かった、お粗末な私であった。本当に申し訳ありません」と、頭が下がったという経験をすることがあります。こういう経験があったからといって真宗の信心をいただいたとはいえません。うっかりすると、自分の罪悪を感じて「本当にお粗末な私でした」と泣くようなことがあると、「ああ私は信心を頂いたので」と思うことがありましようが、それが直ちに真宗の信心とはいえないのであります。それは私の悪が反省自知されたに過ぎません。

西田幾太郎博士が哲学者の務台理作氏に出された手紙に、ある人の立場を批判している文章がありますので参考までに引用します。

「お手紙拝見。ミダの呼声というものが出て来ない浄土宗的世界観は浄土宗的世界観にならないと思えます。そんな世界では何処から仏の救済というものが出てくるのでしょうか。あの人は宗教というものを事実とせないで唯頭で考えているので少しも体験的に沈潜して見ないので。ザンゲばかりの世界は道徳の世界で

宗教の世界ではありません。宗教心というものが自分からのものでなく、向こうからのものでなければなりません」

(「西田幾太郎随筆集」364頁、岩波文庫)

ここで浄土宗的世界観というのとはもちろん浄土真宗的世界観と同意です。自分の悪を知って懺悔するだけの立場は道徳であり、「自分からのもの」すなわち私からでた行いでありまう。ところが本当の回心に向こうからいわゆる(弥陀から)のものであり、弥陀とのあいがあるのです。どれほど深刻な懺悔でも自分が自分の悪を批判し反省して悔い改めようとするのは「人間が人間を」「私が私を」という人間的立場いわば良心の立場であって、それは道徳的立場であります。人間を超えた無限なる徳とのあいという宗教的立場とは違います。

道徳と宗教は似てますから、ともすると道徳的な回心懺悔を宗教的な回心と取り違えてしまい、それをもつてよしとしてしまいます。

*

道徳的な廻心懺悔は、そのつど自分の行為を批判して懺悔していく、それはまさに「断悪修善」(悪を断じて善を修する)の行いといえましよう。この第十六章では、廻心懺悔という断悪修善的な行いを往生浄土への助けにしようとしているようにもすがええまうし、あるいは信心をいただいた人なら廻心懺悔をするのが当然であるというような領解は、畢竟弥陀をたのまらずして自分をたのむ自力執心の姿であります。

(了)

【秋季彼岸永代経法要】

9月22日（水）

午後2時始まり

（どなたでもご自由にお参りください）